

2.太白山

①太白山の由来

太白山には今もなお語り継がれている数々の伝説があります。古くから、太白山を生出森、独活が山と書き、オドガモリ、ウドガモリと呼ばれてきたのも、その伝説による物です。しかし、いつ頃、どんな理由から太白山と称するようになったのでしょうか。このことについて「太白山県自然環境保全地域学術調査書」に詳しく著されています。「太白産は日本固有の山名ではない。太白山の太白は宵の明星金星をさす中国名である。そして、中国にも全く同じ太白山が存在する。」しかし「同盟の山をあえて臥すに当たっては、そこに何らかの理由がなければならないのである。」が、「中国の太白山は、仙台の端正な円錐状の算用とはずいぶん趣を異にしており、高さも約 10 倍の大きさを誇っている。」中国と仙台の太白山では高さも山の形も全く違うそうです。では、両者に共通する何かがあるのでしょうか。それは「命名の基礎となる視点の位置と山岳の関係」つまり、中国の太白山は西安（唐の都長安）から見て「宵の明星金星、すなわち太白星がその山上に輝く位置、そして沈む位置」にあるということです。



仙台の太白山も仙台城から眺めると、金星＝太白星が輝き没する位置に存在します。仙台藩の儒学者が「太白星地に墜ちてこの山となる」と言っておどガモリを太白山と名付けたのは、まさにその位置関係（都と金星と山）が中国と同じであることに気づいたからこそ、中国の「太白山の山名をあえてこの山に付した」のでしょう。『広報文

化財 18 号』仙台市教育委員会文化財課]

②太白山の伝説

太白山の起源

昔々、太白山のあたりは、山ではなく、広い広い野原だったそうです。その茂庭の村にオトアという美しい娘が住んでいました。ある晩のこと、夜中にオトアが厠に起きたところ、ゴーッという地鳴りのような音が聞こえてきました。オトアは不思議に思って、その音のする方を見たら何と目の前で大きな石や黒い土のかたまりがむくむくと夜の空に向かって盛り上がっているところでした。大きな石や黒い土のかたまりは首でも振るように低い地鳴りをさせながら、どんどん盛り上がって小さな山からだんだん大きな山になっていきました。オトアは驚いて思わず「あんれえっ、とんがった山になっていくー。」と、大きな声を出しました。美しいオトアの声にびっくりした山は、恥ずかしくなったのかむくむく盛り上がっていくのをぴたっとやめてしまいました。

ちょうど、オトアに見られた山がむくむく盛り上がっていた時、志田郡の鹿島台の辺りがへこんでしまった。そこが品井沼だということです。生出が森は、駿河（静岡県）の富士山と同じところに出来た山なので、このことを聞いた村人たちは「もしもオトアに見られなかったら、富士山よりもっともっと高い山になったのに。」とって残念がったそうです。そこから、太白山は、一晩のうちに生い出たので「生出が森」と呼ばれるようになりました。また、娘の名にちなんで「オトア森」ともいわれています。〔仙台市立太白小学校(1984)『わたしたちの太白』〕

生出が森と独活の大木

昔、生出が森に独活（うど）の大木が茂っていました。独活（うど）の大木は、とても大きくてその枝葉が四里四方に広がって、麓の村々ではお天道様の光が当たらないので田畑の作物は実らなくなっていました。

村人は、大変困って相談した結果、この独活（うど）の大木を切り倒すことにしました。次の日大勢の村人が斧を手に早く大木切り倒そうとしましたが、夕方になっても切り倒すことが出来ませんでした。

次の日に切り倒すことにして、次の朝に行くと不思議なことに、なんと昨日切ったところがその日の切り屑が集まって一晩ですっかり元通りになっていました。昨日切った筈の木の切り屑は一つも落ちていませんでした。そこで、また切り倒しにかかりましたが、その日に夕方になっても、やっぱり切り倒すことが出来ませんでした。

次の日も、そのまた次の日も、何度繰り返しても切り倒すことが出来ないで、村人は村の長老に尋ねたところ「独活（うど）は神様の化身だから、生出が森の天辺に貴船神社を祀ればよい」と教えられ、大同二年（八〇七年）の八月、京都から貴船明神の分霊を移して祀りました。そして、村人は三昼夜祈願をして、やっと独活（うど）の大木を切り倒すことが出来たといいます。その時、独活（うど）の幹が南側を流れている名取川の水底に沈んで埋もれ木になったそうです。

村人は生出が森の麓に、切り倒した独活（うど）の大木の精を慰めるために「大木山雲道寺」を建てて供養しましたが、現在その寺はありません。今、山頂にある石宮は貴船神社の祠です。

また、文治五年（一一八九年）源頼朝が藤原泰衡を攻め滅ぼすために源氏の守護神である鎌倉の鶴岡八幡宮の分霊を移しました。頼朝は、自分の兜の連花座に飾っていた源氏の氏神正八幡の神像を作らせてその御神体を生出森の山頂に祀りました。これが生出が森八幡神社ということです。

ところが、山は怒り狂い、悪い天候が続いたために、農作物は不作になり村人は途方に
くれてしまった。村人たちは口々に「これはきっと、貴船神社の祟りだ。先に祀った神様
を粗末にしたからだ。」というようになりました。そこで、山頂にあった八幡神社の祠を
生出が森の山腹に移して祀ったところ、これまでの悪い天候が嘘のように治まったそう
です。[仙台市生出公民館内新しいふる里づくり講座「おいで」編集委員会(1991)『もう一つ
の仙台ー生出 第4号』]

太白山の大男

昔、太白山に大男が住んでいました。いつも山のとっぺんにある敷石という大きな岩に
どっかと腰をかけ、右足は一里程南東にある名取の高館山（名取市）の麓の吉田部落の田
圃の中におろし、左足は海岸に近い部落におろして、海から魚や貝を取って食べていま
した。食べた時の貝殻は茂庭の岩の川に捨てたので今でも貝塚のような厚い層になっている



そうです。時々、大男は大きな足で麓の村におりてきま
すが、首は雲の上に突き出しているの、村人たちには
顔が見えません。ただ太い二本の柱がノッシノッシと歩
いてくるのを見るだけだったといいます。この大男、そ
れでも性格は優しく、麓の村人が田畑の仕事で忙しい時
には、村におりてきてよく手伝いをしてくれました。太
白山の南東を流れている洗沢は、大男が汚れた手足を洗
ったところだと語り伝えられています。名取の吉田部落
には、大男の右足の跡だという長さ三尺程の足跡のつい
た石が田圃の中に残っているそうです。[仙台市生出公
民館内新しいふる里づくり講座「おいで」編集委員会
(1991)『もう一つの仙台ー生出 第4号』]

メッコ（片目）の神様

独活（うど）が森の神様は片目（メッコ）だという話
があります。ある時、神様は山の中を歩いていて、誤って独活（うど）の枯れ茎で目をつ
いてしまい、そのために片目が見えなくなっていました。麓の茂庭や梨野では「独活
（うど）を食べてはいけない」とされ、畑にも独活（うど）は作っていません。神様と
同じように独活（うど）の枯れ茎で片目になることを恐れたのか、あるいは神様を敬って
そうにしたのかも知れません。また一説には、独活（うど）は神様の化身だから、独活
（うど）を食べたり畑に植えたりしては駄目だといわれているそうです。

[仙台市生出公民館内新しいふる里づくり講座「おいで」編集委員会(1991)『もう一つの仙
台ー生出 第4号』]